

## 性規範の問い直しを主題とした保健授業の成果と課題 —中学生を対象として—

白石 愛<sup>1)</sup> 濱本 想子<sup>2)</sup> 岩田 昌太郎<sup>3)</sup>

キーワード：性規範の問い直し、性の多様性、保健授業、中学生

### 1. はじめに

2016年に、文部科学省は「性同一性障害や性的指向・性自認に係る、児童生徒に対するきめ細やかな対応等の実施について（教職員向け）」を出した<sup>1)</sup>。以降、教職員研修等の実施によって、性的マイノリティ<sup>注1)</sup>の児童生徒に対する個別の配慮や、性の多様性に関する教育の必要性は学校教育関係者に認識されることとなった。しかし、依然として性的マイノリティの児童生徒の学校教育における生きづらさが解消されたとは言い難い。なぜなら、既存の性に関する規範（以下、性規範と明記）に基づいて構築された学校の制度の多くは、徐々に見直されてきてはいるものの、依然として存在しているからである。ここでは、現代に既存する2つの性規範を取り上げる。

第1に、性について公に語るべきではない、恥ずかしいことであるという規範である。国際的な動向を見ると、1999年に「性の権利宣言」<sup>2)</sup>（2014年に改訂：性の健康世界学会、2014）が採択されて以降、2009年にUNESCOから「国際セクシュアリティ教育ガイダンス」（初版）<sup>3)</sup>が発表され、性を包括的に学習することの必要性についての理解が広まりつつある。一方、日本では、「性的欲望や性的欲求について公的に語ることをタブー視する見方が根強く残る<sup>4)</sup>。そのため、学校における性教育では、生殖を中心とした性が扱われ、さらにジェンダーの視点が欠落しており、子どもたちの学びの希望が反映されていないという課題がある<sup>5)</sup>。その結果、若者たちが性についての正しい情報にアクセスできず、友人やメディアから得る情報に翻弄され、性に関する偏見やタブーを再生産してしまうなど、多くの問題が生じている<sup>6)</sup>。日本に限らず情報化社会の中で、こうした状況は、親や教員など周囲の大人たちの性的行動、社

会規範について公の場で議論することを阻止する態度や法によって助長されている<sup>7)</sup>。また、反橋<sup>8)</sup>は、性における学習において、性がポルノグラフィ的に意味づけられてしまうことによって、生徒も授業をする教員も恥ずかしさを抱いていることを明らかにしている。つまり、学校における性の学習以前に、生徒は先に述べたような周囲の大人の性への態度やメディアを通して性をネガティブなものとして捉え、性＝恥ずかしいことという規範を内在化していると解釈できる。さらに、このような性教育に対する消極的な姿勢は、必然的に性の多様性の学習を明示的なカリキュラムに位置付けることを困難にする。事実、性的マイノリティ当事者に対する調査<sup>9)</sup>では、年代によって異なるが回答者全体において、約7割（68.0%）が学校教育で同性愛を一切習っていないと回答している。このような事態は、性的マイノリティの児童生徒にとって特に深刻な問題であり、自身のセクシュアリティについて正しい情報を得ることができないことによって、自分に対して嫌悪感を抱いたり、ロールモデルを持ちにくいというような状況を引き起こしたりしている<sup>10)</sup>。

第2に性別二元論と異性愛主義という規範である。例えば、学校現場では男女別の制服、男女別の出席簿、男女別習の体育授業、男女別の整列など、あらゆる場面で用いられている。宮崎<sup>11)</sup>は、このような性別による区分は、日本の教育の慣習、あるいは教室統制の手段として用いられていることを明らかにしている。また、学校で扱われる教材には異性愛しか登場せず、同性愛について言及されている教材はわずかしかない。このように、学校には性別二元論や異性愛主義といった性規範とそれに基づいて構築された制度が存在している。さらに、男・女、異性愛以外の性の在り方は取り上げられてこなかった。さらに、教師や児童生徒にもこれらの性規範が内在

1) 福山市立鷹取中学校

2) 名城大学

3) 広島大学

化されている。それによって、無意識のうちに教師や児童生徒によって差別的・嫌悪的言動がなされていることも性的マイノリティの児童生徒の生きづらさの要因である。例えば、「ホモ」「オカマ」「レズ」などや、それらをネタにすることで笑いをとるといった言動は明らかに差別事象であるにも関わらず、発言している当事者が「差別用語」であることに無自覚であるとともに、これらが指導されることなく放置されている<sup>12)</sup>ことが挙げられる。性的マイノリティの当事者に対する調査<sup>9)</sup>によると、回答者15,064名のうち7割以上が学校や職場で差別的な発言を経験していることが明らかにされている。また、ゲイ・バイセクシュアル男性が、性的指向に関する苦勞や葛藤、関心を引き起こす出来事を中学校・高等学校の学齢期に相当する時期に集中して経験している<sup>13)</sup>。すなわち、性的マイノリティ自身もこれらの規範を内在化することによって、自己受容が困難になるという事態も引き起こされるのである。

以上より、性的マイノリティの児童生徒らの生きづらさを解消するためには、特別に配慮するだけではなく、学校の既存の性規範を見直すとともに、性の多様性についての学習の機会を設けることが早急に取り組むべき課題である。

そこで近年、性の多様性に関する授業開発が積極的に行われるようになってきた<sup>14)</sup>。こうした授業は、周囲の人の多様な性の在り方に対する寛容さを育むだけではなく、性的マイノリティの児童生徒にとっては自身が肯定されることにつながる可能性が指摘されている<sup>12)</sup>。しかし、その多くが雑誌等に掲載された実践報告であり、研究や論文として授業の成果を検証しているものは少ない。また、これらの多くの授業の課題として、単に性の多様性に関する正しい知識を身に付けさせることだけを目的とした場合、「自分とは異なるマイノリティの人に優しくしよう」という認識にとどまっている<sup>15)</sup>。したがって、先に述べたような性的マイノリティの生きづらさの要因である規範とそれに基づいて構築された既存の社会文化や制度の見直しの必要性に気付くに至らないという問題が挙げられる。

性の多様性についての学びを促す上では、「知識」や支援のための「スキル」を教えることに加えて、自分自身の見方や規範への「気づき」と、知りたいと思う「動機づけ」が重要であるという<sup>16)</sup>。また、渡辺<sup>17)</sup>は、全ての人が自分ごととして考えることが

できるよう、自分も性の多様性の中に位置づくことと、「異性愛」や「シスジェンダー」だけが「普通」とされ、「性的マイノリティ」だけがマジョリティに「理解」され「受け入れ」られるために説明を求められるという構造を問うことが重要であると主張している<sup>17)</sup>。しかし、そのような視点で構成された授業成果の検証はなされていないのが現状である。

そこで本研究では、自分と身の回りの性規範とそれに基づいて構築された制度を問い直し、多様な性のあり方に対する寛容さを構築することをねらいとした授業を構想・実践し、その成果を検証することを目的とする。

## II. 研究方法

### 1. 授業のデザイン

#### 1.1. 教科の選定

様々な教科のうち、特に体育科は身体が深く関わることによって、性別二元論や異性愛主義が強固な規範として作用している側面を持つ。また、性的マイノリティにとって「侮蔑やからかい、暴力の対象となったり、自身の性のありようを隠さなければならなかったりするような抑圧的な場」として感じられたり、排除されたりすることが起こり得る<sup>18)</sup>。他方、保健科についても現行学習指導要領解説には男・女以外の性のあり方や、異性愛以外の性的指向についての記述は見られず、体育科と同様、性的マイノリティの児童生徒にとって抑圧的な場として機能していると考えられる。

一方で、性の多様性に関する授業の実践に際して、学校現場は限られた授業時数の中、多くの学習内容を習得させることが求められているため、できるだけ既存のカリキュラムと統合させた形での授業実践の提案が求められているといえよう。このような視点で見ると、保健科ではすでに、性について心身の発育・発達という側面から学習することが学習内容として定められているため、性の多様性を学習内容として組み込みやすいのではないかと考えられる。また、生徒は性教育を主に保健体育科で行われていると認識しており<sup>19)</sup>、生徒自身も違和感なく学習すべき大切な内容として認識しやすいと予想される。

先に述べた通り、性の多様性という視点で見た時、保健体育科には課題が山積している。しかし、このような現状を逆にとり、授業の中で「体育(スポー

ツ) や保健が性の多様性を排除していないか？」と問うことで、保健体育科が生徒の性規範を問い直す視点を育み、多様な性のあり方に対する寛容さを構築し、性的マイノリティの児童生徒をエンパワメントする場となり得るのでないだろうか。

そこで、本授業は、平成 29 年告示の中学校学習指導要領 保健体育 保健分野 (2) 心身の機能の発達と心の健康、ア(イ)「思春期には、内分泌の働きによって生殖に関わる機能が成熟すること。また、成熟に伴う変化に対応した適切な行動が必要となること」の内容として扱うこととする。

## 1.2. 対象及び授業の実施時期

「多様な性」についての学びこそ、性を学ぶ際の基礎として位置づけられる必要があるということが、生徒の学習課題から考えても明らかにされている<sup>20)</sup>。具体的には、第 1 学年で「多様な性」について学習することの必要性が言及されている<sup>20)</sup>。そこで本研究では、A 大学附属 S 中学校 1 年 2 クラスの生徒 80 名を対象とした。授業 (全 3 時間) は、2019 年 11 月に実施した。

## 1.3. 授業者

授業者は S 中学校の保健体育を担当する教師 X (教師歴 1 年) であり、筆者らは協同的に授業構想を行い、授業の観察も行った。

## 1.4. 授業のテーマと目標

授業のテーマは、「身の回りの『ふつう』を見直す」(全 3 時間) とした。授業の目標は、「自分と身の回りの性規範を相対化し、多様な性のあり方に対する寛容さを構築することができる」とした。

## 1.5. 授業の全体構成

表 1 に、授業の全体構成と学習内容を示した。授業は 3 部構成からなる。第 1 段階は、性=公に話してはいけないこと、恥ずかしいことという規範を相対化する学習である。第 2 段階は、性別二元論と異性愛主義という規範を相対化する学習である。第 3 段階は、性別二元論と異性愛主義という規範に基づいて、自他の言動や制度が構築されていることに気付き、多様な性のあり方を尊重する方法を考える学習である。また、各時の終わりに「授業を通して学んだこと」についてワークシートに記述し、自分の価値観と対話する学習を行う。以下に、各段階の詳細を示す。

### (1) 第 1 段階

第 1 段階では、性=公に話してはいけないこと、

恥ずかしいという規範を相対化する。先に述べた通り、生徒は学校における性の学習以前に、周囲の大人の性に対する態度やメディアを通して、性をネガティブなものとして捉え、性=恥ずかしいことという規範を内在化していると考えられる。そこで、生徒が初めにこの規範を相対化し、性は人がより良く生きるために大切なものとして肯定的に捉えることができるようになる必要があると考えた。そのために、以下の 3 つの学習を設定した。

### a) 「性とはなにか」

稲葉<sup>5)</sup> は性=生殖として捉えることによって同性愛を排除してきたと指摘し、性を「生物学的側面だけでなく、社会や文化、さまざまな要素の影響を受けて構成されるもの」として包括的に捉えることが重要であると指摘する。そこで、授業の冒頭に「性という言葉聞いてどのようなことをイメージするか？」と問い、性には生殖以外の側面もあることを広く捉えさせることとした。

### b) 「生殖に関わる機能の成熟」

金子ら<sup>21)</sup> は対談の中で、多様性理解の前提としてからだの学習を通して、「からだは個々にちがいが、みんな『違っていい』」ことを実感することが重要であるとしている。そこで、クイズを通して、生殖に関わる機能の成熟の程度や始まる時期には個人差があることを理解する学習を 1 時間目に設定した。性を扱う際に、(1) 性差を強調するのではなく、「共通性」に着目すること、(2) グラデーションとして多様性を理解することなどが多様性理解のポイントとして挙げられている<sup>22)</sup>。それを踏まえて、学習のめあては、「生殖に関わる働きが成熟について女子と男子の共通点とちがいを説明できるようになる」として、性差だけではなく、共通点に着目できるようにした。併せて、多様な性器の形状をイラストで示し、グラデーションを視覚的に理解できるようにした。

### c) 「性に対する考え方の国による違い」

日本とスウェーデンの月経用品の扱われ方の違いについての感想が述べられている「LiLico さんの話」<sup>23)</sup> を読み、気付いたことをワークシートにまとめる。月経用品を購入する際、日本では黒い袋に入れて、隠すのに対して、スウェーデンでは堂々と持ち歩くことができる。この 2 つの事象を比べることで、国によって性に対する考え方に違いがあることに気付き、日本における性の扱われ方を相対化できるようにした。

表1 授業の概要

日時	時間	学習内容	主な学習活動（◎発問 / ・活動）	段階
11月5日	1時間目	<ul style="list-style-type: none"> <li>性は複雑で、生物的、社会的、心理的など様々な側面があり、生殖はその中の1つの側面である</li> </ul>	◎性という言葉聞いてどのようなことをイメージしますか	性＝公に話してはいけないこと、恥ずかしいことという規範を相対化する
		<p>[めあて] 生殖に関わる働きの成熟について女子と男子の共通点とちがいを説明できるようになる</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>思春期には性腺刺激ホルモンの働きにより性器が発育し、生殖機能が発達する</li> <li>男女の性器と生殖機能の仕組み</li> <li>性器の形や生殖機能の発達の程度や時期には個人差がある</li> <li>受精、着床、妊娠の仕組み</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>性に関する考え方は国によって異なる</li> <li>性＝公に話してはいけないこと、恥ずかしいことではない</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎生殖機能の成熟を始めるスイッチの役割をしているのは何か？</li> <li>・男性・女性の性器と生殖機能の仕組みに関するクイズ</li> <li>・教師の説明を聞き、ワークシートに整理</li> <li>・生殖に関わる働きの成熟について男女の共通点とちがいをワークシートに整理</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>・資料「LiLicoさんの話」を読み、日本とスウェーデンの月経用品の扱われ方を比較し、気づきをワークシートにまとめる</li> </ul>	
11月8日	2時間目	<p>[めあて] 人間の性は明確に男・女に二分できるかどうかを考える</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・特に体が関わる場面で分けられている</li> <li>・性器の形状や見た目など、体が規準</li> </ul>	◎どのような場面で男・女に分けるか？ ◎何を規準に分けているか？ ◎体は明確に男・女に二分できるか？ ・資料「DSDと不妊の事例」を読み、問に対する考えをワークシートにまとめる	性別二元論、異性愛主義という規範を相対化する
		<ul style="list-style-type: none"> <li>・性分化は複雑な過程を経るため、その過程で体の性が多様になり得る可能性がある</li> </ul>	◎体の性はどうやって決まるのか？ ・性分化の過程について教師の説明を聞く ◎人間は明確に男・女に二分できるか？	
11月11・12日	3時間目	<ul style="list-style-type: none"> <li>・異性を好きになることが普通という考えの問題性</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・資料「Bさんの悩み」を読む</li> <li>◎Aさんの「彼女いるの？」という質問にBさんが答えを誤魔化したのはなぜか？</li> <li>◎Bさんを困らせているのは何か？</li> <li>・性を捉える3つの視点について教師の説明を聞き、自分がどこに位置づくのかを考える</li> </ul>	規範に基づいて、自他の言動や制度が構築されていることに気づき、多様な性のあり方の尊重する方法を考える
		<ul style="list-style-type: none"> <li>・性には、性自認、体の性、性的指向という3つの捉え方があり、それらはグラデーションをなしている</li> <li>・シスジェンダーかつ異性愛であることが「普通」とされていて、それ以外の性のあり方が「普通でない」とされていることで困っている人がいる</li> </ul>	◎学校の中に性的マイノリティの人が困る仕組みはあるか？ ◎性の多様性が尊重されているフィンランドの教科書と日本の教科書にはどのような違いがあるか？	
		<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校の中にも男・女に二分している場面や、異性愛を当たり前とする場面がある</li> <li>・国によって教科書に違いがあり、教科書も、作られたものである</li> </ul> <p>[めあて] 色々な性のあり方が尊重される教科書をつくらう</p>	◎日本の教科書をどのように書き換えるか考え、ワークシートに整理しよう ・気づき・感想を班で共有しよう	

(2) 第2段階

第2段階では、性別二元論と異性愛主義という規範を相対化する。そのために、以下の3つの学習を設定した。

a) 「体の性を男女に区別することの限界について考える」

「Differences of Sex Development：性に関する体の様々な発達状態（以下、DSDと明記）」と授業用に作成した「自身が不妊の可能性があるので周囲の人に『女性失格』と責められることに悩む人の話」を読み、「体の性は男・女に二分できるのか」という問いについて自分の考えをワークシートにまとめる。また、性分化の複雑な過程を知り、体の性が多様になり得る可能性があることを理解する。性別の基盤には肉体的な差異、とりわけ性器の違いが存在する

とすることは暗黙裡とされている<sup>24)</sup>。つまり、多くの生徒が「体の性が男・女に二分できる」という規範を持っていると考えられる。したがって、仮に授業で、性が多様であることを学んでも、体の性の多様性について学習しなければ、生徒の規範が「人間は男・女に二分できる」という内容に容易に修正されてしまう可能性がある。以上を踏まえて、体の性が多様になり得ることを理解する学習を設定した。

b) 『彼女いるの?』という問いの問題性について考える」

性的指向が同性であることで、Aさんの「彼女いるの?」という質問への返答に悩むBさんの姿を描いた漫画資料<sup>25)</sup>を読み、Aさんの質問に対してBさんが答えを誤魔化した理由を考える。ここでは、何気なく発せられた「彼女いるの?」という質問が、

性的指向が同性である人を排除していることに気付かせることをねらいとして設定した。また、Bさんが答えを誤魔化した理由について考えることを通し、「彼女いるの?」という質問の背景に「男性は女性を好きになる」、言い換えれば「全ての人が異性を好きになる」という規範が存在することに気付かせ、第3段階への接続を図った。

#### c) 「性の多様性」

性には、性自認、体の性、性的指向という3つの捉え方があり、それぞれグラデーションをなしていることを理解する。その後、「あなたはどこに位置しますか?」という問いについて考え、自分自身も多様性の中に位置づくことを確認する。その際、渡辺<sup>17)</sup>の指摘を踏まえ、「普通」とされる性のあり方（性自認と体の性が一致していて、異性愛である）にも、シスジェンダー、異性愛という呼び方があることも伝える。また、Bさんのように、性のあり方が「普通」でないことによって、生きづらさを感じている人がいることについても理解できるようにした。

#### (3) 第3段階

第3段階では、性別二元論と異性愛主義という規範に基づき、自他の言動や制度が構築されていることに気づき、多様な性のあり方を尊重する方法を考える。そのために、以下の2つの学習を設定した。

##### a) 「日本とフィンランドの教科書比較」

日本の保健教科書とフィンランドの生物教科書<sup>26)</sup>を読み比べ、その違いを分析し、ワークシートにまとめ、班やクラスで交流する。ここでは、「普通」とされている考え方（主に性別二元論と異性愛主義という規範）に基づいて自他の言動や制度が構築されていることに気付かせることを意図している。そこで、性的マイノリティの人が生きづらさを感じる学校の仕組みの1つとして、生徒にとって身近な教科書を具体例に挙げ、他国の教科書と比較することで、日本の教科書を相対化する学習を設定した。本来ならば、同じ教科の教科書同士を比較させることが適切であるが、日本のように保健という教科で性に関する学習内容を扱っている国は少なく、理科や社会など、複数の教科にまたがって扱われていることが多い。そこで、教科に囚われず、日本の保健教科書と取り扱う内容が似ていることを条件に、比較対象となる教科書を選定した。また、フィンランドの教科書を選定した理由は、①性の生殖の側面に限らず、

心理・社会的な側面についても記述されている、②性を含めた、人種、文化等の多様性についての記述がある、③過度に男・女を強調していない、という点が日本の保健教科書と異なっており、性の多様性が尊重されていると判断したためである。

##### b) 「日本の教科書を書き換える」

これまでの学習のまとめとして、日本の保健教科書を「色々な性のあり方を尊重する教科書」へと書き換えを行う。この学習を通して、「これまで『普通』『当たり前』と思っていたことを批判的に思考することが、多様な性のあり方を尊重するための具体的な方法の1つである」ということを、生徒に気付かせる。

## 2. 調査内容及び分析方法

授業の成果を検証するために、①授業前後における多様な性のあり方に対する寛容さの変容と、②授業を通して学んだことについて、それぞれ以下の通り調査を実施した。

### 2.1. 「同性愛嫌悪・トランス嫌悪尺度」と分析方法

授業前後における生徒の多様な性のあり方に対する寛容さの変容を明らかにするため、「同性愛嫌悪・トランス嫌悪尺度」<sup>27)</sup>を用いて、授業前(2019年11月5日)と授業後(2019年11月13日)の比較分析を行った。本尺度は、異性愛以外の性的指向の1つである同性愛及び、性自認と体の性の不一致に対する嫌悪感を測定することを目的として、中学生用に作成されたものである。回答は、「とてもそう思わない-とてもそう思う」の5件法とした。具体的な質問項目を表2に示す。

分析は、記入漏れ等のあった生徒を除いた、合計71名の回答を対象とした。得られた回答は、同性愛に対する嫌悪感、性自認と体の性の不一致に対する嫌悪感が高いほど、得点が高くなるように得点化(とてもそう思わない-1点、そう思わない-2点、どちらでもない-3点、そう思う-4点、とてもそう思う-5点)し、8項目の合計得点を尺度得点とした。授業前後の尺度得点についてノンパラメトリック検定であるWilcoxonの符号付順位和検定にて検討した。すべての統計処理には、EZR (Easy R)<sup>28)</sup>のVer1.41、windows版(64bit)を用いた。有意水準は5%未満に設定した。なお、Rのバージョンは3.5.2、Rコマンドのバージョンは2.5-1であった<sup>29)</sup>。

表2 「同性愛嫌悪・トランス嫌悪尺度」

①同性愛嫌悪
・同性愛者の集団といたら、不安で落ち着かなくなるだろう
・同性の親友が同性愛者だとわかって、全然気にならないだろう（逆転項目）
・公衆の面前で男性二人が手を握り合っていたら、気色が悪いと感じるだろう
・同性カップルで家族を作るとは良くないことだと思う
②トランス嫌悪
・女性が男性のようにふるまうなんて、理解できない
・女性のような服装をした男性なんて気持ちが悪い
・女性のようにふるまう男性は、自分を恥じるべきだ
・自分のことを男性だと思う女性は、おかしいと思う

## 2.2. 「授業を通して学んだこと」についての記述と分析方法

各授業後にワークシートに記述した「授業を通して学んだこと」の内容から、授業を通して性規範を問い直し、多様な性のあり方に対する寛容さを構築することが出来たかどうか、探求することとした。

得られたデータは、KJ法<sup>30)</sup>を用いて分析を行った。この手法は、生徒が何を学んでいるかを、生徒の記述から忠実に読み取ることを目指す本調査の目的と合致したため、分析方法として採用した。分析は、記述を1切片が1つの意味をもつように区切り、切片作成後にそれらの切片を用いてグループ編成を行い、その関係性を図解化(A型)し、文章化(B型)するという手順で行った。このように図解化の後に文章化を行う方法はKJ法AB型<sup>30)</sup>と呼ばれている。

### 3. 倫理的配慮

本研究に関わる全ての調査は、事前に管理責任者であるS中学校の校長及び副校長、保健体育主任1名に対し、調査の内容について書面及び口頭により説明を行い、許可を得て行った。対象者には、回答は強制ではなく、自由意志によること、調査への不参加・回答によって教育・学習上の不利益は生じないこと、個人の特定がされないことを説明し、了承を得た。本調査は、広島大学大学院教育学研究科倫理審査委員会の承認を得て行われ、承認番号は2019541である。

## III. 結果及び考察

### 1. 生徒の「同性愛嫌悪・トランス嫌悪」の推移

生徒の「同性愛嫌悪・トランス嫌悪」得点は、授

業実施前の平均値が18.7 (SD 5.99)であったのに対し、授業実施後には15.2 (SD 5.92)であり、授業前後で「同性愛嫌悪・トランス嫌悪」得点は有意に低下した ( $p < 0.001$ )。このことから、本授業では、多様な性のあり方に対する寛容な態度を構築することに効果があったことが明らかとなった。佐々木<sup>27)</sup>は、統制群を設けて授業の効果を測定することで、例えば人権教育を行っていたとしても、性の多様性をテーマにして授業を行わなければ、嫌悪を低減させることはできないことを主張している。本授業についても、授業後に「同性愛嫌悪・トランス嫌悪」得点が低下したことから、性の多様性について授業で扱うことの意義が改めて確認された。

一方、標準偏差が大きいことから、生徒間で得点の差があることが分かる。先行研究では、自認する性別によって嫌悪感の高さに差があることや、学習活動の受け止め方が異なることが明らかにされている<sup>31)</sup>。本授業においても、自認する性別等によって授業内容の受け止め方は大きく異なっていた可能性がある。しかし、因果関係まで明らかにはできなかった。

### 2. 「授業を通して学んだこと」に関する生徒の記述と考察

各授業の「授業を通して学んだこと」をテーマとした生徒の自由記述の分類結果を表3から5に示す。また、生徒の記述の関係性について示したA型図解化の結果を図1から3に示す。図中の(○/○/○)は、各カテゴリに分類された切片の数を表している。左から小カテゴリ、中カテゴリ、大カテゴリとなっている。「一」は、それ以上抽象化がなされなかったこと示している。また、図中では、小カテゴリは枠

線無し、中カテゴリは点線、大カテゴリは実線で表している。以降では、B型文章化の結果と考察を述べていく。なお、文章中では、小カテゴリは□、中カテゴリは《》、大カテゴリは【】で示している。

## 2.1. 性規範の問い直しを意図した学習活動の成果と課題

1時間目の学習では、表3と図1より、生徒が、【自他の体について】理解することを通して【性への肯定的なイメージ】を獲得し、【性に関する社会の現状に対する問題意識】を持ったことが分かる。具体的には、【自他の体について】は、《体の仕組みの見事さ》を感じながら、成長に伴う体の変化の仕方と成長の程度や仕方に個人差があることが普通であること、そして、男女には違いだけではなく共通点もあることを理解していた。このように【自他の体

について】理解したことが、[体の変化に向き合おうとする]など、性に対して向き合おうとする《前向きな姿勢》につながった。また、日本とスウェーデンにおける月経用品の扱われ方を比較して、月経を「恥ずかしいことではない」と言ったLiLicoさんの言葉に共感しながら《国による性に対する考え方の違い》を理解することで、《性=恥ずかしいことではない》という【性への肯定的なイメージ】を獲得していた。さらに、これらの2つの理解が《性は恥ずかしいという風潮への問題意識》、《性を理由とした差別や偏見への問題意識》、《性に関するからかいへの問題意識》などの、【性に関する社会の現状に対する問題意識】を持つことに繋がっていた。

この結果から、1時間目の学習を通して、性=恥ずかしいことという規範を相対化し、性について肯

表3 「授業を通して学んだこと」についての記述（1時間目）

【大カテゴリ】 (記述数)	《中カテゴリ》 (記述数)	[小カテゴリ] (記述数)	具体的な記述例
自他の体について (111)	体の仕組みの見事さ (10)	体の仕組みについての驚き (5)	射精のときは尿が出ないようにされていて、その機能はすごいと驚いた
		新しい疑問 (5)	双子の場合どうなって受精するのか
	成長に伴う体の変化 (58)	生殖に関わる機能の成熟 (18)	自分たちの体は大人になるにつれて、だんだん新しい命を育むための準備が進んでいることが分かった
		成長に伴い体に変化する (11)	成長することによって、心や体に変化が現れる
	男女の違いと共通点 (20)	自分の体について (19)	自分の体のことをたくさん知る機会になった
		性について (10)	性のことについてわしく勉強できた
	変化と個人差について (23)	男女の違い (13)	男性と女性でちがもたくさんあるなど感じました
		男女の共通点 (7)	だいたいけど女性と男性の体はなんとなく似ているなどと思った
	性に関する社会の現状に対する問題意識 (21)	変化があることは当たり前 (14)	こういう体の変化はだれでも起こること
		個人差があることが普通 (9)	人によって個人差があることをちゃんと知っておきたいと思った
性への肯定的なイメージ (47)	性は恥ずかしいという風潮への問題意識 (8)	恥ずかしいというふうちようが日本にあるのは少し残念な所だと思った	
	性を理由とした差別や偏見への問題意識 (3)	LiLicoさんが言ったように男女ともに分かり合える社会になったらいいと思った	
	性に関するからかいへの問題意識 (10)	だれにでも起こることなのだから茶化したりするのは絶対ダメだと思う	
前向きな姿勢 (17)	お互いを思いやることの大切さ (6)	(体の変化が)遅くてもはやくても、周りの人がその人の気持ちによりそうことが大事だと思う	
	体の変化に向き合おうとする (6)	あせらず自分の成長に向き合っていこうと思った	
	困っている人がいたら助けたい (5)	誰か困っている人がいたら、相談に乗ってあげたい	
性=恥ずかしいことではない (22)	性に関する現象は恥ずかしいことではない (12)	私も初めて生理があった時にはすごく驚いたけど、決して恥ずかしいことではないんだと思い、少し気が楽になった気がします	
	性について話すことは恥ずかしいことではない (10)	今回学習したことで、みんな恥ずかしものと思わなくなったのではないと思う	
-	LiLicoさんの言葉への共感 (8)	LiLicoさんの発言も聞いて、恥ずかしいことではないという言葉にグッときた	
-	国による性に対する考え方の違い (7)	海外と日本では考え方のちがうことがあって驚いた	

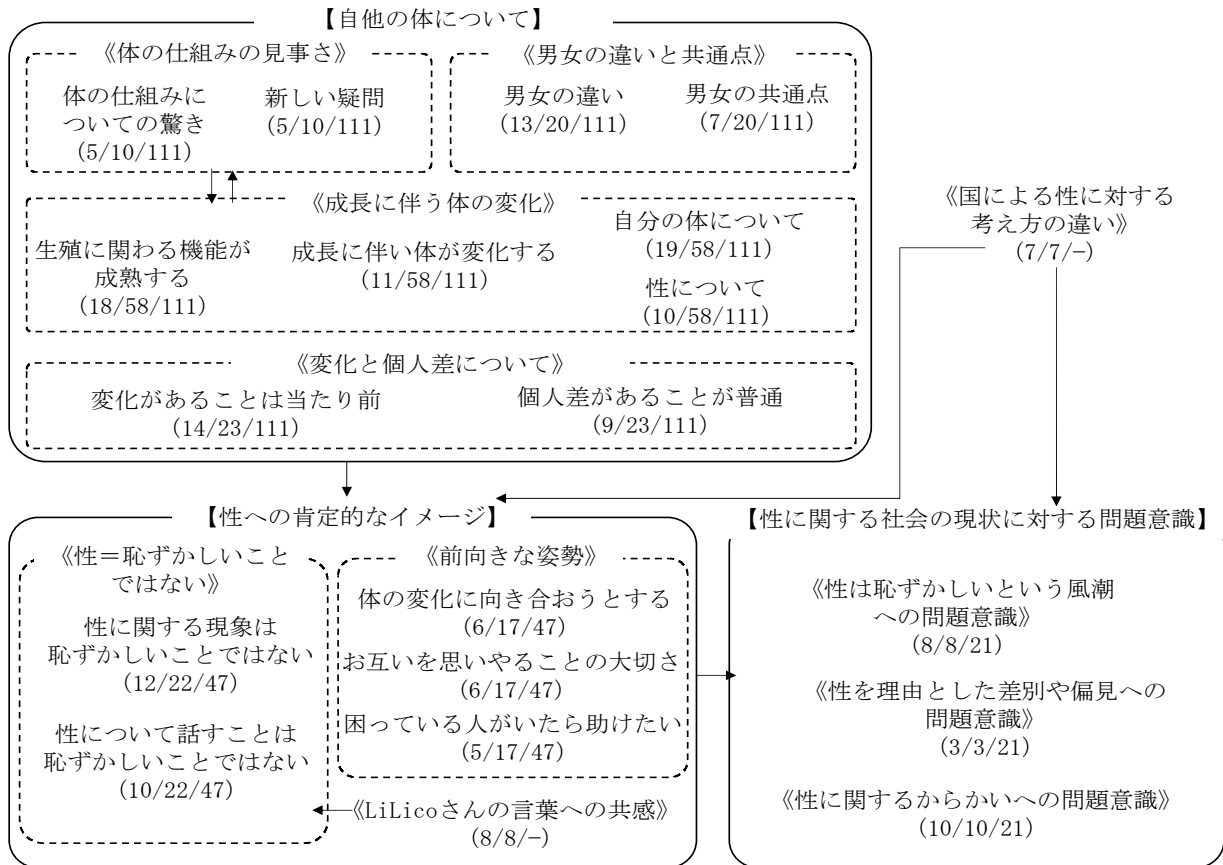


図1 1時間目の授業における生徒の学び

定的に捉えることができた」と推察される。つまり、第1段階のねらいを達成するために設定した3つの学習活動「性とはなにか」「生殖に関わる機能の成熟」「性に対する考え方の国による違い」の成果があったと考えられる。特に、金子ほか<sup>21)</sup>は多様性理解の前提として「からだの学習」が重要であることを指摘している。本授業においても、「生殖に関わる機能の成熟」として、体の変化がなぜ・どのように起きるのかを納得できるように丁寧に説明したことが【性への肯定的なイメージ】を獲得することに効果的だった可能性がある。また、《性は恥ずかしいという風潮への問題意識》は、《国による性に対する考え方の違い》を理解することで生じており、規範を相対化する上で、他国との比較が効果的であることが示唆された。

2時間目の学習では、表4と図2より、【体の性で性別を判別することの相対化】をするとともに、【性について生きやすい社会をつくる方法】について思考するに至っていたことが分かる。具体的には、【体の性で性別を判別することの相対化】について、中カテゴリは《体の性で性別を決められない》と《性

別の判断規準の広がり》の2つであり、体の性で男女に区別することの限界に気づき、性別の判断規準が広がっていた。他方、【性について生きやすい社会をつくる方法】について、中カテゴリは《社会の仕組みに対する問題意識》、《解決策》と《新たな選択肢をつくることへの葛藤》の3つ、《解決策》の小カテゴリは[配慮の必要性]、[男・女以外の選択肢をつくる]、[性別概念の限界]、[教育の必要性]の4つであった。《性別が男・女に当てはまらない人の存在》を知ることによって《混乱・葛藤》しつつも《性の多様さ》を理解したことが、体の性で性別を区分することの限界に気付かせ、性について生きやすい社会をつくる方法を模索することに影響していたと思われる。

これらの結果から、2時間目の学習を通して、性別二元論という性規範を相対化することができたと推察される。つまり、性別の基盤には肉体的な差異が存在する<sup>24)</sup>という規範を問い直すことを意図して行った、「体の性を男女に区分することの限界について考える」学習活動については一定の成果があったと考えられる。一方で、《混乱・葛藤》が生じてい



たことから、性分化の過程の学習など、生徒にとっては理解が困難であった可能性もある。また、「でも、実際に男子と更衣室が一緒になったら、どうしたらいいかわからない」や「女性専用車両とかはどうなるの？」などの授業中の発言や、「男や女での性器のちがいはあるものの同じところや遺伝子などによって変わるところもあるのでどのように分ければいいのか逆に分からなくなってしまう」などの記述が見られた。すなわち、これまで体の性を根拠に分けられることが「当たり前」であった多くの生徒にとっては、いくら「体の性は多様になり得る可能性がある」と言われても、実感を伴って理解することは難しかったのではないかと考えられる。さらに、時間内に第2段階の「『彼女いるの?』という問いの問題性について考える」学習活動と「性の多様性」につ

いての学習活動を行うことができなかった。そのため、異性愛主義について言及している記述は見られず、《混乱・葛藤》を抱いたまま、授業を終えることに繋がった可能性がある。

3時間目の学習では、表5と図3より、《フィンランドの教科書のよさ》と《日本の教科書の問題点》を含む【日本とフィンランドの教科書の違い】についての気付きと、[1人1人違う存在]であることを理解し、[当たり前前に苦しむ人の存在]を認知したことによって、【みんなが生きやすい社会をつくる方法】について理解していたことが分かる。具体的にみんなが生きやすい社会をつくる方法としては、[当たり前前を疑う]こと、その「当たり前」が反映して作られた日本の教科書を「性の多様性を取り上げる教科書へ」書き換えること、そして「学校の男女分けの

表4 「授業を通して学んだこと」についての記述（2時間目）

【大カテゴリー】 (記述数)	《中カテゴリー》 (記述数)	【小カテゴリー】 (記述数)	具体的な記述例
性別が男・女に当てはまらない人の存在 (17)		知ろうとする姿勢 (3)	ホルモン等の難しいものがあるがしっかりと理解していきたいと思った
		男・女に当てはまらない性をもつ人 (14)	体のせいにも男でも女でも当てはまらない人がいることを知った
		体の性の多様さ (10)	自分が知っているだけじゃなくて自分が知らないような多様な種類の性があることが分かった
		性の多様さ (5)	この世には色々な性の人がいるなどと思った
性別が男・女に当てはまらない人の存在の認知 (51)	性の多様さ (19)	心の性の多様さ (4)	体の性は女・男の2種類に分けられても、心の性はもっといろんな性別に分けられる可能性があると思う
		性の複雑さ (2)	今日は男と女の性別だけだと今まで思っていたけれど、今回別の性が作られる可能性が0%ではないと知り、本当に性って複雑で、難しいと感じた
		混乱・葛藤 (15)	性に分けることの難しさ (13)
体の性で性別を判別することの相対化 (31)	体の性で性別を決められない (26)	体の性で男・女に分けられない (17)	どちらにもびったりと当てはまらないという人も世の中にはいるので、体の性で男・女の2種類に分けることはできないということを学んだ
		体の性で男・女に分けない方がよい (9)	体の性で「女」「男」と決めつけてしまうのはよくないと思った
		性別の判断規準の広がり (5)	社会的には男性または女性でも、本人の心によって決まるのかもしれないと思った
性について生きやすい社会をつくる方法 (24)	解決策 (13)	配慮の必要性 (6)	むりやり2つのせんとくしにわけずに、考えて話さなければいけないと思った
		男・女以外の選択肢をつくる (5)	トイレや制服は男と女だけではなく、その他もつくった方が良く思う
		性別概念の限界 (1)	この世の中に「性別」という境界線があることによって、誰かが悩むことになるから、そこをどうしたらいいかを考えないといけないと思った
		教育の必要性 (1)	わくをつくらず、教育とかでこういう人（知られていない性のあり方の人）がいるというところから始めるべき
-	新たな選択肢をつくることへの葛藤 (3)	社会の仕組みに対する問題意識 (7)	男・女のどちらでもない人のわくをつくった方が良くは思うが、色々数えきれないほどのわくができてしまい社会が混乱してしまうのではないかと、そう考えると変えたくても変えられない複雑な気持ちだと思った
		保健で学習することの必要性 (1)	社会には男性や女性の属さない人がおり、今の社会の状況ではそのような人が傷ついてしまうかもしれないということを考えた
-	保健で学習することの必要性 (1)		女と男の2つに分けるがいねんが人それぞれで「絶対これ！」っていうのが決まっていらないように感じた。だからすごい難しくてこういう保健の授業でこのことについて考えないといけないのかなと思った

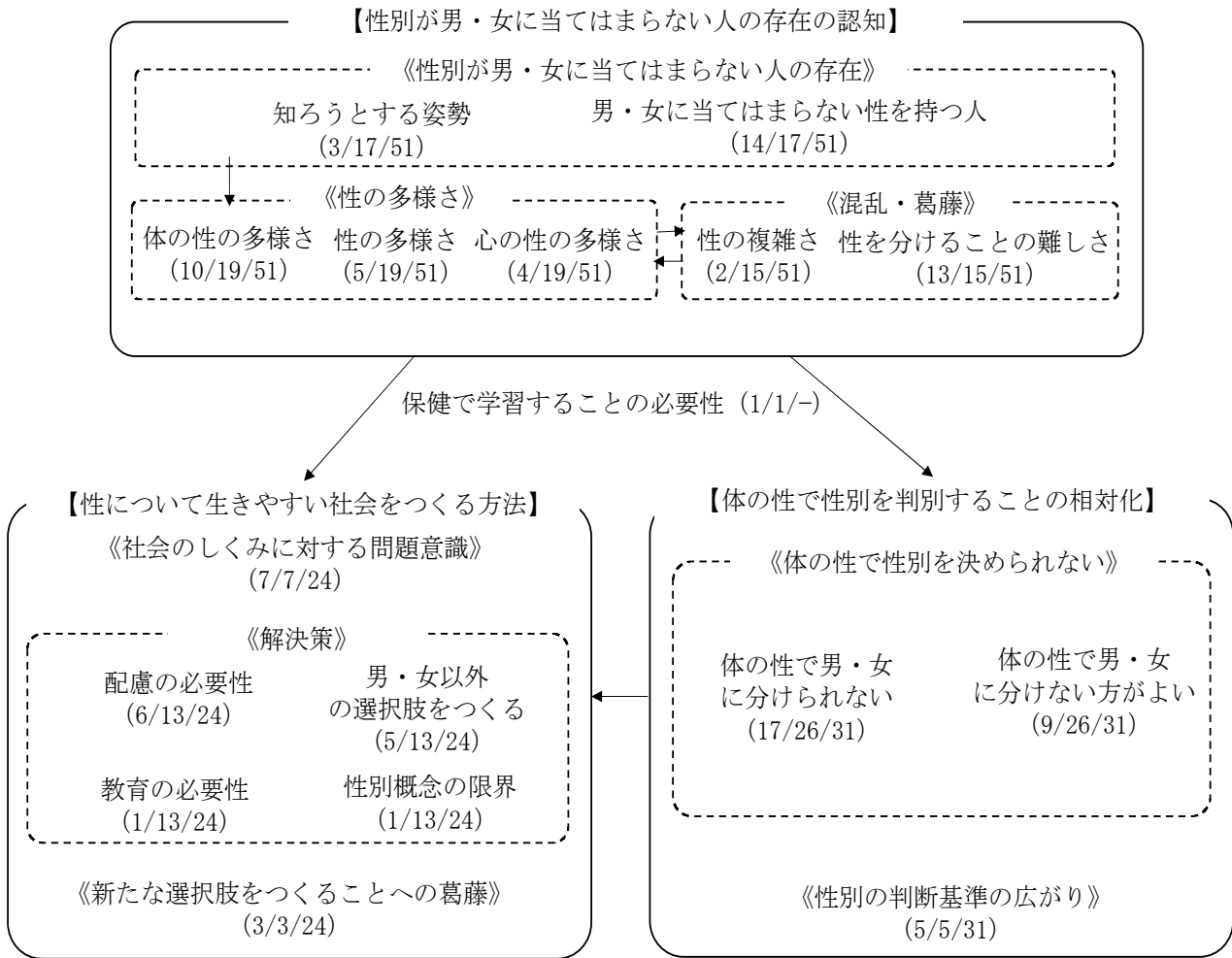


図2 2時間目の授業における生徒の学び

仕組みを見直す]など、《既存の枠組みの見直し》が必要であることを理解していた。一方で、現状を変えるには難しさが伴うことも感じていた。加えて、[色々な性のあり方を受け入れる]、[みんなのことを考える]、[違いを理解し合う]というように《違いを尊重する》態度もみんなが生きやすい社会をつくるためには重要であることについて理解していた。授業の中では、「規範」を「普通」や「当たり前」という言葉に置き換えて用いていたため、記述には「規範」という言葉は見られなかった。しかし、その内実から、生徒は性規範を問い直し、多様な性の在り方を尊重する方法について考えることができたと判断できる。《既存の枠組みの見直し》のうち、[性の多様性を取り上げる教科書へ]に区分された切片数が最も多かったことから、【日本とフィンランドの教科書の違い】についての気付きが生じたことの影響が大きかったことが推察される。これは、身近な

ものが性規範に基づいて作られていることを批判的に捉えることができるようになることを意図して行った、「日本とフィンランドの教科書比較」と「日本の教科書を書き換える」学習活動の成果であると考えられる。

教科書を批判的に読み、書き換えるといった活動は、積極的に「社会をよりよくしていこう」という理想が根底にあるクリティカル・リテラシーを養う上で重要であると言われている<sup>32)</sup>。また、授業で批判的に教科書を活用することにより、生徒は、教科書記述が中立公平な絶対的真理ではないことを理解し、権威や常識を批判的に捉えることができるようになることが指摘されている<sup>33)</sup>。身の回りの「普通」（ここでいう常識）を批判的に捉えることができるようになることを目的としていた本授業においても、教科書比較という学習活動を通して生徒に先の2つの指摘にあるようなポジティブな批判的思考を促す

ことができたと考えられる。つまり、生徒たちは、学校を含む社会における《既存の枠組みの見直し》の必要性を理解することに至ったのではないかと推察される。

なお、教科書比較を通じて、《既存の枠組みの見直し》の必要性に気付くに至ったのは、次の2つの要因が考えられる。第1に、性の多様性を尊重しているフィンランドの教科書をネガティブに捉えるのではなく、良いものとして認識されていたことである。これは、性を捉える3つの視点（性自認・体の性・性的指向）と性はグラデーションの様相を成すことを知ることで、性の多様性を理解することを意図した学習活動を行ったこと、1時間目の学習において、性がよりよく生きる上で大切なものであると肯定的に理解したことの影響であろう。第2に、1・2時間目の学習で、【性に関する社会の現状に対する問題意識】、《社会の仕組みに対する問題意識》が生じていたことである。葛西<sup>16)</sup>は、多様な性のあり方に対し

て寛容になるためには、自分自身の見方や規範への「気付き」や「知りたい」という動機付けが重要であると指摘している。本授業では、前時までの学習で性に関する社会の現状についての課題意識を抱いていたことが動機となり、フィンランドの教科書を「どうすれば多様な性のあり方を尊重する社会の仕組みを構築できるのだろうか」という自分なりの疑問を持ちながら、読み解くことにつながった可能性がある。このことから、3時間目の教科書を比較した学習活動は、1・2時間目の学習を統括して、さらに深める学習活動として機能していたのではないかと考えられる。

2.2. 授業構成の成果と課題

授業構成の成果として、次の2点が挙げられる。

1 点目に、自分と身の回りの性規範とそれに基づいて構築された制度を問い直す視点を育む授業構成の例を示したことである。性の多様性の学習において、マジョリティの性のあり方も含めた「私たちの

表5 「授業を通して学んだこと」についての記述（3時間目）

【大カテゴリー】 (記述数)	《中カテゴリー》 (記述数)	[小カテゴリー] (記述数)	具体的な記述例
日本とフィンランド 教科書の違い (39)	日本の教科書の 問題点 (18)	日本の教科書の問題点 (4)	私は完全な男性、完全な女性歯科を取り上げていない日本の教科書はおかしいと初めて思った
		性の学習の不十分さ (7)	教科書もまだ性についての理解が深まっていないと思った
		性的マイノリティに対する 配慮のなさ (7)	教科書では、個人差があることは誰もが知っているのに、男子、女子とはっきり分けたりと少数派の意見を聞かないような書き方をするのはよくない
	フィンランドの 教科書のよさ (13)	性の多様性を尊重している フィンランドの教科書 (10)	多様な性があり、それは趣味のちがいと 同じみたいな感じのことを書いていたのを見ると温かさを感じた
		フィンランドの教科書のよさ (3)	性のちがいを否定するのではなく、エネルギーととらえているフィンランドの教科書は良いと思った
	国による教科書の 違い (4)	国による教科書の違い (2)	国と国で性に対しての考え方やそれを表す(教科書など)ものも多くのちがいがあった
		日本とフィンランドの 教科書の違い (2)	日本の教科書、フィンランドの教科書で性について取り上げる量が全然違うと思った
	他国の教科書への興味関心 (3)		色々な国の保体の教科書を見てみたいと思った。本当に全員が気持ちよく使える教科書があるかどうか知りたいと思ったから
	日本の教科書のよさ (1)		日本はちゃんと授業をしないと、全ては分からないので、そこが日本の教科書の良いところではないかと思った
	みんなが生きやすい 社会をつくる方法 (50)	既存の枠組みの 見直し (36)	当たり前を疑う (14)
性の多様性を取り上げる 教科書へ (17)			日本の教科書もフィンランドの教科書のように、多様な性についてやさしく書いて、みんなが違和感なくすごせるようになっていったらいいと思う
学校の男女分けの仕組みを 見直す (2)			今までは何も感じなかったけど、学校の中でも男女の事しか考えられていない場所もあったので、少しずつでも改善されていけば良いと思う
現状を変えることの難しさ (3)			オリンピックの競技でも、男と女と「2つの選択肢」しかない。そのしくみをかえていくのはとても難しいと思った
違いの尊重 (14)		色々な性の在り方を 受け入れる (8)	別に何が正解とか普通とかなく他の人を受け入れるほうがみんな生きやすいと思う
	みんなのことを考える (4)	男性はこう、女性はこうなどという差別的な分け方をすると傷つく人も出てくるしみんなのことを考えていくことが大切になってくると思った	
	違いを理解し合う (2)	ちがいを理解し合うことで良い社会になっていくんだなと思った	
-	1人1人違う存在 (9)	一人一人、個性があって性も個性も人によってちがう	
-	当たり前で苦しむ人の存在 (6)	今の社会の固定観念の1つである性的指向が異性愛中心であることで、性的指向について悩んでいる人がいることが分かった	

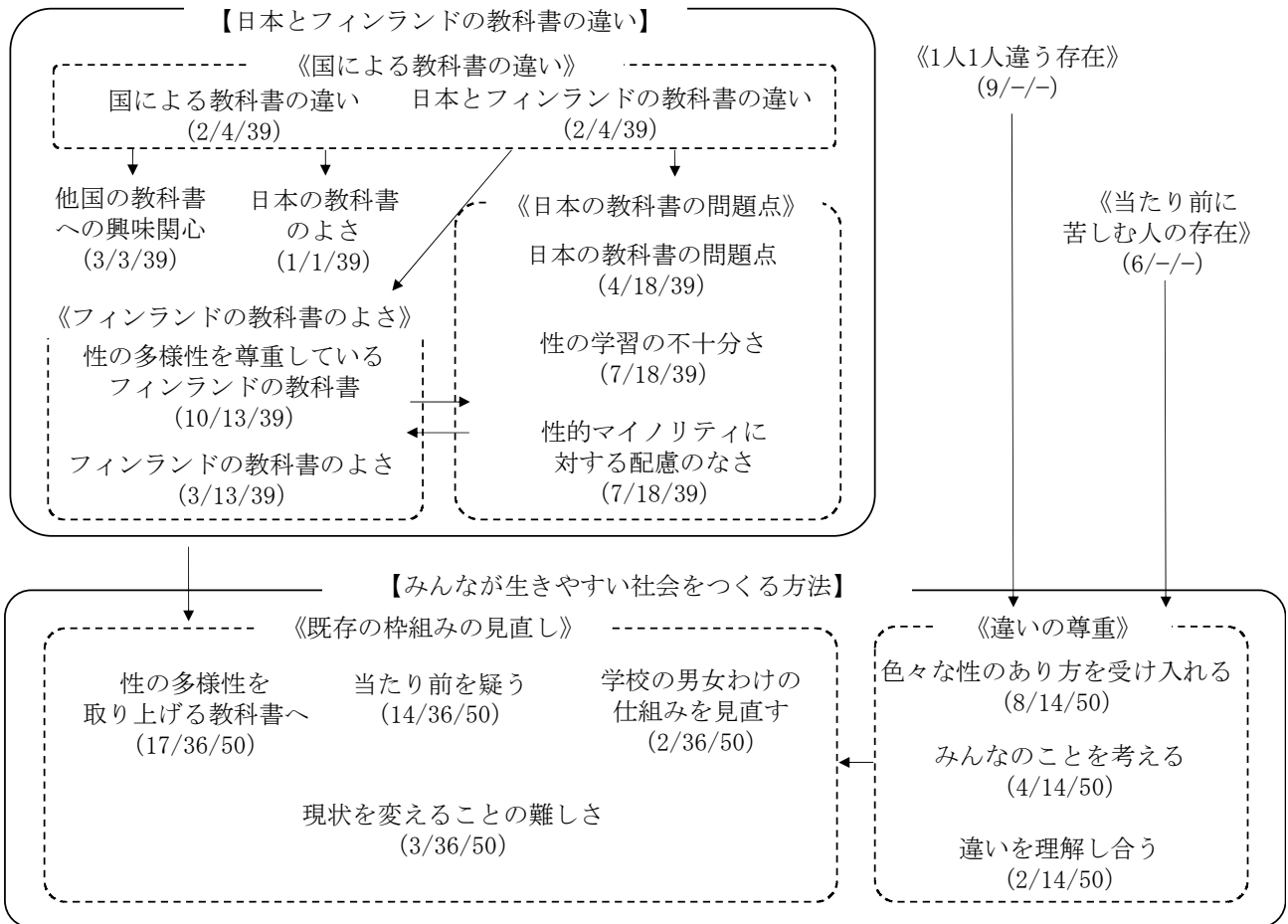


図3 3時間目の授業における生徒の学び

性の多様性」について学び、「普通」がどのようにして構築されたのかを考えることが重要であると指摘されている<sup>17)</sup>。本授業においても、自分自身が性の多様性の中に位置づくことを学んだ後に、教科書比較を通して身の回りの「普通」の問題性を考えるという順序で授業を構成した。このことが、生徒の認識変容に効果的だった可能性がある。

2点目に、保健科に内在する既存の性規範とそれに関連して生じうる問題を、授業の教材として取り上げることの有用性について示したことである。従来、保健科教育では学習指導要領や教科書の中で男女と異性愛という2つの典型的な性の在り方しか記述されていないことなどによって、性的マイノリティに生きづらさを感じさせる教科として機能してしまっていることが指摘されてきた<sup>34)-36)</sup>。しかし、本研究を通して、教師が教科書「を」教えるのではなく、教科書「で」教えるという視点を持って授業を行うことで、生徒の規範に基づいて構築された既存の社会の枠組みについて批判的に考える視点を育むことができる可能性が示唆された。

授業構成の課題として、次の2点が挙げられる。

1点目に、多様な性のあり方に対する嫌悪感の変容が見られなかった生徒も一定数いたことである。これらの生徒の記述の特徴として、「その人たちのことを考えることも大切」「(日本の教科書の書き方では)同性を好きになる人に失礼」など、性的マイノリティを「自分とは違う人のこと」と捉え、問題を自分ごととして捉えることができていなかったという点が挙げられる。これは、自分自身を性の多様性の中に位置づけることができていなかったからではないかと推察される。近年の性的マイノリティをめぐる言説の多くは、セクシュアリティに関するアイデンティティが、時間の経過や状況によって変わる流動的なものとして解釈することを推奨する立場に立つ<sup>37)</sup>。しかしながら、本授業を通して、この点を十分に伝えることができなかったため、生徒の中に、「自分とは違う人のことを学んでいる」という認識が生じた可能性がある。今後、「当事者性」<sup>38)</sup>を育む学習活動の充実が課題であり、例えば、性を捉える3つの視点(性自認・体の性・性的指向)を学習する

際に、全ての人にとって、セクシュアリティは移り変わるものであることを伝えることで、自分自身の性のあり方も変化していくものであることに関する理解を促すことも必要であろう。

2点目に、授業が3時間という限られた時間で一度限りの学びであった点である。学校現場において、男女別の制服の見直しが行われるなど、多様な性のあり方が尊重される環境づくりが少しずつ進んでいる。しかしながら、学校・社会において、依然として性別二元論・異性愛主義といった性規範は根強く存在しているため、生徒は授業で学んだことと、現実の齟齬を体感し続け、「認知的不協和」(cognitive dissonance)<sup>39)</sup>を生じる可能性がある。そして、その齟齬を解消するために、授業で学んだことを現実に合うように書き換えてしまったり、「自分には関係ないことだから」といった新しい認知を付け加えてしまったりする可能性が高いということである。その結果、書き加えられたり、新しく加えられたりした認知によって、生徒の性的マイノリティを排除しようとする態度が再形成されることが十分に予測される。性教育の国際的な指針である、「国際セクシュアリティ教育ガイダンス 改訂版」<sup>7)</sup>では、性に関する包括的な情報を、年齢・成長に即した内容でスパイラル的に学ぶことができる機会を設けることの必要性が述べられている。本授業で主題とした、性の多様性に関する学習内容についても、年齢に応じた内容を繰り返し学習できるよう、どの教科で何を教えることが適切かを議論し、明示的なカリキュラムに位置付けることが必要である。

#### IV. まとめと今後の課題

これまで、熱心な教師や研究者によって、性の多様性を扱った授業実践は蓄積されてきたものの、その成果については十分に議論されているとは言い難い現状があった。その中で、本研究は、自分と社会に内面化された性規範を問い直すことをねらいとした授業実践の成果が見込めたといえよう。そのような点で、多様な性のあり方に対する寛容さの向上に一定の効果を得た一事例の蓄積として意義があったと思われる。しかしながら、学習活動、授業構成や授業のねらい、指導方法などについての課題も残り、議論の余地がある。また、性の多様性に関する学習内容を明示的なカリキュラムに位置付けるためには、

親や教職員、教育内容を決定する立場にある大人の性に対する認識を問い直すことも必要であろう。例えば、教職員を対象として性の多様性の理解を促す研修も実施されている<sup>40)</sup>。子どもに対する教育方法を模索していくと同時に、大人が性について肯定的に学ぶことができる場をいかに構築するかについても、今後更なる研究が蓄積されることを期待したい。

最後に、本研究の限界として、次の2点が挙げられる。第1に、生徒の認識に影響を及ぼした要因について、授業外の要素を検討できていない点である。例えば、学校風土や、教師X及びその他の教師の態度、授業外での生徒同士のやり取り、他教科の学習など、さまざまな要因が考えられるだろう。したがって、この点についてはインタビュー調査を実施し、より詳細に検討する必要がある。第2に、生徒の記述や、数値の妥当性についてである。授業以前に多くの生徒は「差別はいけない」という規範を内面化していると考えられる。だからこそ、教師に対して提出する記述やアンケートが、本音ではなく、建前であることも大いに考えられる。今後は、学校現場でも実践可能な、生徒の本音を検討することができる尺度や調査方法の開発が望まれる。

#### 付記

本論文は、広島大学から2019年3月に修士(教育学)の学位を授与された修士論文「性規範の問い直しを主題とした保健授業の効果の検討：中学校1年生を対象とした授業を事例として」の一部を加筆・修正したものである。

#### 注

注1) 性的マイノリティとは、「身体的性別、性自認、性的指向などが、男女二元論と異性愛主義社会の『常識』に対応しない人」<sup>41)</sup>や、「性に関して社会の想定する『普通』ではないあり方を生きる人々を指す総称」であり、「『普通』に性を生きるという圧力によって傷つく人々」<sup>37)</sup>とされる。

#### 文献

- 1) 文部科学省：性同一性障害や性的指向・性自認に係る、児童生徒に対するきめ細かな対応等の実施について(教職員向け), [https://www.mext.go.jp/content/20210215\\_mxt\\_sigakugy\\_1420538\\_00003\\_18.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20210215_mxt_sigakugy_1420538_00003_18.pdf), 2019年8月10日。
- 2) 性の健康世界学会：性の権利宣言, <https://worldsexualhealth.net/wp-content/uploads/2014/10/DSR-Japanese.pdf> (邦訳版：東優子ら), 2022年3月10日, <http://www.worl>

- dssexology.org/resources/declaration-of-sexual-rights/(原本).
- 3) UNESCO: International technical guidance on sexuality education: an evidence-informed approach for schools, teachers and health educators, <https://unesdoc.unesco.org/ark:/48223/pf0000183281>, 2022年3月10日.
  - 4) 猪瀬友里: 中学生・高校生の月経観・射精観とその文化的背景, 現代社会学研究, 23: 1-18, 2010.
  - 5) 稲葉昭子: 学校教育におけるセクシュアル・マイノリティ, 創価大学大学院紀要, 32: 259-280, 2010.
  - 6) 青野篤子: 社会におけるジェンダーの病理, 157-177, 海保博之 監修・福富護 編: 朝倉心理学講座14 ジェンダー心理学, 朝倉書店, 東京, 2006.
  - 7) UNESCO・浅井春夫ら 訳: 国際セクシュアリティ教育ガイダンス【改訂版】-科学的根拠に基づいたアプローチ, 明石書店, 東京, 2020.
  - 8) 反橋一憲: 「恥ずかしさ」に着目した性教育の課題-保健体育科教員へのインタビューデータを用いた探索的考察-, 早稲田大学大学院教育学研究科紀要別冊, 26 (1): 81-91, 2018.
  - 9) 日高庸晴: LGBT当事者の意識調査-いじめ問題と職場環境等の課題-, [http://www.health-issue.jp/reach\\_online2016\\_report.pdf](http://www.health-issue.jp/reach_online2016_report.pdf), 2019年11月9日.
  - 10) 認定特定非営利活動法人 ReBit: 多様な性に関する授業がもたらす教育効果の調査報告, [https://rebitlgbt.org/pdf/lgbt\\_surveyreport.pdf](https://rebitlgbt.org/pdf/lgbt_surveyreport.pdf), 2021年10月3日.
  - 11) 宮崎あゆみ: 学校における「性役割の社会化」再考-教師による性別カテゴリー使用を手がかりとして-, 教育社会学研究, 48: 105-123, 1991.
  - 12) 今井貴代子, 山田公二: 学校の中の「見えない/見える」セクシュアルマイノリティ, 111-129, 木村涼子・古久保さくら編, ジェンダーで考える教育の現在, 解放出版社, 大阪, 2008.
  - 13) 日高庸晴ら: ゲイ・バイセクシュアル男性のHIV感染リスク行動と精神的健康およびライフイベントに関する研究, 日本エイズ学会誌, 6 (3): 165-173, 2004.
  - 14) 土肥いつき: 性の多様性を学校でどのように教えるか, 小児保健研究, 79 (2): 135-139, 2020.
  - 15) 葛西真記子: LGBTQ+の児童・生徒・学生への支援, 3-16, 葛西真記子 編, 教育現場におけるLGBTQ+, 誠信書房, 東京都, 2019.
  - 16) 葛西真記子: 教員の意識変容と啓発をどう行うか, 17-30, 葛西真記子 編, 教育現場におけるLGBTQ+, 誠信書房, 東京都, 2019.
  - 17) 渡辺大輔: 「性の多様性」教育の方法と課題, 145-166, 三成美保 編, 教育とLGBTIをつなぐ, 青弓社, 東京都, 2017.
  - 18) 藤山新: 第5章 体育・スポーツの場面における性的マイノリティに関するフォビアの様相, 日本スポーツ協会スポーツ医・科学研究報告, 2017(2): 51-57, 2017.
  - 19) 橋本紀子ら: 日本の中学校における性教育の現状と課題, 教育学研究室紀要, 「教育とジェンダー」研究, 9: 3-20, 2011.
  - 20) 田代美江子ら: ジェンダー・バイアスを問い直す授業づくり「性の多様性」を前提とする中学校の性教育, 埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要, 13: 91-98, 2014.
  - 21) 金子由美子ら: [特集] 鼎談 多様性が尊重される学校は誰もが大切にされる場所, 季刊 Sexuality, 74: 16-31, 2016.
  - 22) 『季刊sexuality』編集委員会: 「多様性の学習」をすすめるための4つのポイント, 季刊 Sexuality, 74: 32-35, 2016.
  - 23) BuzzFeed: スウェーデン人は8歳で男女一緒に「生理」を学ぶよ. LiLiCoの「もっとホンネで話そう. 私たちのこと」, [https://www.huffingtonpost.jp/entry/lilico\\_jp\\_5da7be45e4b0b5c9be48c9cb](https://www.huffingtonpost.jp/entry/lilico_jp_5da7be45e4b0b5c9be48c9cb), 2019年10月20日.
  - 24) 萩野美穂: ジェンダー化される身体, 勁草書房, 東京, 2002.
  - 25) 渡辺大輔: column マンガカミングアウト. マンガワークシートで学ぶ 多様な性と生 ジェンダー・LGBTQ・家族・自分について考える, 62-63, 子ども未来社, 東京, 2019.
  - 26) Hoiopainen M. et al.: Elämä ja evoluutio/ Ihminen LUONNONKIRJA 7-9, 2005. (=鈴木誠監訳: フィンランド理科教科書【生物編】, 化学同人, 京都, 2014.)
  - 27) 佐々木掌子: 中学校における「性の多様性」授業の教育効果, 教育心理学研究, 66 (4): 313-326, 2018.
  - 28) Kanda Y.: Investigation of the freely available easy-to-use software 'EZR' for medical statistics, Bone Marrow Transplantation, 48:452-458, 2013.
  - 29) 自治医科大学附属埼玉医療センター血液科, 統計ソフトEZR, <https://www.jichi.ac.jp/saitama-sct/SaitamaHP.files/download.html>, 2019年12月15日.
  - 30) 川喜田二郎: 発想法 改版, 中央公論新社, 東京, 1967.
  - 31) 石原英樹: 日本における同性愛に対する寛容性の拡大-「世界価値調査」から探るメカニズム, 相関社会科学, 22: 23-41, 2012.
  - 32) 熊谷由理ら: 日本語学習における批判性・創造性の育成への試み-「教科書書きかえ」プロジェクト-, 世界の日本語教育, 19: 177-197, 2009.
  - 33) 藤瀬泰司ら: 批判的教科書活用論に基づく中学校社会科授業開発 (1) -「産業革命と欧米諸国」の場合-, 熊本大学教育学実践研究, 32: 77-88, 2015.
  - 34) 藤山新: 保健体育科教育とセクシュアル・マイノリティ-性の多様性という観点から-, 女子体育, 60 (12・1): 12-15, 2018.
  - 35) 松尾由希子: 学校教育における性の多様性の扱われ方, これまでとこれから-戦後から今日の学習指導要領より-, 高校生活指導, 202: 64-72, 2016.
  - 36) 佐藤年明: 小学校学習指導要領は性をどう扱ってきたか, 教育, 874: 15-22, 2018.
  - 37) 森山至貴: LGBTを読みとく-クィア・スタディーズ入

- 門, 59, 筑摩書房, 東京, 2017.
- 38) 渡辺大輔ら：中学校における「性の多様性」理解のための授業づくり, 埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要, 10 : 97-104, 2011.
- 39) Festinger, L. : A Theory of cognitive dissonance. Stanford University Press, California, 1957.
- 40) 真野豊：“性の多様性”に関する理解を促すための教職員研修の実践とその効果に関する考察, 広島修大論集, 60(1), 115-132, 2019.
- 41) 松尾由希子：学校教育と社会における性的マイノリティに関する言説研究：1990年以降の教育メディアと新聞記事の記述分析, 静岡大学教育研究, 9 : 17-38, 2013.
- (2021年12月27日投稿受付, 2022年9月1日受理)